



ちょっとそこまで ～お散歩日和 (地域編)～



啓 志 線

「ケイシー」と聞いて、誰を思い出すのかという連想ゲームをすると、一体どういう結果になるのでしょうか。少々気になります。

年配者は、TVドラマシリーズの「ベン・ケイシー」ではないでしょうか。オープニングの「男・女・誕生・死・無限大」と言いながら黒板に記号を書いていくシーンから始まって、患者を載せたストレッチャーが移動しながら廊下の天井を映し出すとともに、不気味な音楽が流れ出すと、余りの恐さに布団にもぐりこんだ記憶しか残っていません。もちろん、この流れで「ケイシー高峰」さんも入ってくるのかもしれませんが。



FENから「全米トップ40」を通して、アメリカの風を届けてくれた「ケイシー・ケイスン」もありかもしれません。毎週土曜日の午後はずっとくぎ付けでした。同じ頃にディスコブームが起き、「KC&ザ・サンシャイン・バンド」も候補に挙がるかもしれません。彼らのことが分からなくても「ザッツ・ザ・ウェイ」の曲を聞いただけで、あああれかとなりそうです。直近では、デサンティス・フロリダ州知事の奥さんがケイシーなので、ひょっとすると近いうちに彼女がファーストレディとして注目されるかもしれません。

今回紹介するのは、光が丘に最も縁の深い、グラントハイツ建設工事総責任者のヒュー・ボイド・ケイシー中尉、またはその父親のヒュー・ジョン・ケイシー少将の名前にちなんで名付けられた「ケイシー線（啓志線）」です。気動車の姿を今に残す、たった1枚の貴重な写真がこれで、現在の錦2丁目辺りです。



父親のケイシー少将に関して言えば、現在のペンタゴンの設計者としても有名であり、退役後に第二次世界大戦中の工兵の活躍を描いた“Engineers of the Southwest Pacific”（南西太平洋の工兵たち）全7巻を執筆しています。



ヒュー・ジョン・ケイシー

さて、東武啓志線の敷設されたルートですが、東武東上線上板橋駅より分岐し、旧陸軍第一造兵廠練馬倉庫（現在の陸上自衛隊練馬駐屯地）を経て、グラントハイツ（現光が丘団地）に至る延長6.3kmの軍用側線でした。当初は練馬倉庫までの2.8kmでしたが、終戦後アメリカ軍が進駐し、グラントハイツ建設に当たり延長を命じられ、1946年（昭和21年）3月敷設されたものです。

工事は国鉄が担当し、運行は東武鉄道に委託されました。昭和21年3月に開通した啓志線は、資材の運搬だけでなくグラントハイツに住む米軍人とその家族の輸送にも使用され、一時期は、池袋～グラントハイツ間を専用のガソリンカーが約30分間隔で運航したとの記録もあります。しかし、1959年（昭和34年）進駐軍撤退をうけて啓志線は全線廃止となりました。

その後、東武鉄道は啓志線を買収して、東上線の支線として活用する計画を持っていましたが、跡地利用の方向性がなかなか定まらないこともあって実現には至りませんでした。もしも迅速にことが進んでいたら、ひょっとしたら、光が丘と池袋は東武線で直結していたことになります。

しかし、残念ながらその後も再開発計画は遅々として進まず、そのうち昭和40年代に入ると、もともとこの路線は地元農民からの借用地であったこともあって返還されると、急速に宅地化が進み、その痕跡を留めるものは何も残ることなく今に至っている次第です。

現在の建物を目印にその跡を追いますと、東上線上板橋駅から上板橋サンライトマンション、北町1丁目の野瀬商店の横を通り、南ガラス、北町第2保育園の横、川越街道を渡り自衛隊、そして、田柄川緑道の北側に沿って光が丘に入っていたと思われます。

また、引き込み線の様子としては、北町周辺の写真が残されています。



啓志線ではありませんが、同じ東武線を走る懐かしい気動車の写真があちこちにありましたので、ここに転載しておきましょう。多少なりとも雰囲気をつかむ一助になるはずです。



次に紹介する航空写真は、国土地理院（USA-R585-No2-1）に残されている写真データで、1949年（昭和24年）と記録されています。



グラントハイツの建物の様子はもとより、ケイシー線が終点に近付いて5本に分岐していることもはっきりと見ることができますが、不慣れだと少し見づらいかもかもしれません。そこで、ケイシー線と現在の光が丘に焦点を当てた地図が「光が丘 昭和時代の地図帳」にありましたので、転載して紹介したいと思います。但し、「田柄第三小」は、現在「秋の陽小」に、「第四中」は「練馬光が丘病院」になっています。

